



「学びのタネ」の大切さに気づかせてくれた生徒たち。

島根大学教育・学生支援本部 大学教育センター副センター長/教授 泉雄二郎

根つことなるもの

島根県の公立高校教員として37年勤務の後、すぐに島根大学に勤務し、5年が過ぎようとしています。教育現場にあって、何が自分を突き動かしているのかを振り返ると、学生時代の研究にたどり着きます。「シナプスの可塑性その行動レベルの解析」これが卒業研究のテーマでした。外部からの刺激によって行動が変化するとき、シナプスが新しい神経回路をつくるために芽を出し、結合の強さが増強される。つまり、脳の機能は、外から与えられる刺激によって変化する。その素過程としてシナプスの可塑性があることを知りました。このことが、人は教育によって良き方向に変わるのだと確信する基盤になっています。

教職を選び、郷里に帰る

大学卒業後は、高校教員として郷里で働くことを選択しました。教員辞令交付式決意表明の一部です。

「二人一人の子どもに対して何をやらねばならないか、という問いを出発点として真摯に実践に取り組んでまいりたいと思います。私達は子どものもつ可能性を押しつぶし刈りとしてしまわない為に、絶えず自らの実践を厳しく吟味し、その質を向上させる努力を怠らない覚悟であります。私達は真実を希求するところと子どもに対する人間としての誠意を失うことなく謙虚に自らの姿勢を省みてゆかねばならないと思います」

読み返して、とても気恥ずかしい思

「学びのタネ」の大切さに気づかせてくれた生徒たち



幸運にも、教員が情性に陥りだすとされる40代後半、松江東高校のSSH（スーパーサイエンスハイスクール）事業に取り組みすることになりました。1年次には、社会科・理科による「石見銀山を科学する」、体育科・家庭科・理科による「運動を科学する」教科横断型授業を実施しました。また、高大連携として

「インプットよりも研究発表や論文作成などアウトプットの機会が多く、人に自分の考えていることを伝えることの難しさや重要さを痛感。私の人生の中で大きな分岐点だった。教科書の中でしかなかった知識が、私たちの生活に暮らしてに急接近。すべての授業の内容が、何らかの形で自分に関係していることが分かり始め日々の勉強に少しづつですが前向きに取り組めるようになる。課題研究を通して、なぜ？本当にそうなのか？と考えるようになりました。」

島根大学 JICA 事業参加 島根県立高校 教員

彼ら彼女らのセンター試験の得点を見たら、おそらく大部分の高校教員は「国立大学なんてとても届かない。4年制大学は難しいのではないか」と判断するでしょう。しかし、彼らは、高校時代につかんだ好奇心や探究心により学びを継続し、それぞれにダイナミックに生き生きと充実した人生を歩んでいます。アカデミックスコア以外にも、もっともっと大切なものがある。それは、継続的な学びを動機づける好奇心や探究心、つまり「学びのタネ」なのだ。と彼らから学びました。気づくのが遅すぎました。今、罪滅ぼしの日々です。



論文を送ってくれた生徒(左)、トヨタに就職した生徒(中央) 松江東高校 SSHの島根大学実験講座(2005年8月)にて

ことが論文に掲載されました」と添えられていました。驚きました。彼女は、センター試験の点数が不十分で、第一志望の国立大学への進学を断念。「生命科学の研究者になりたい」との希望を持ち、私立大学に進学していきました。私は、とても研究者としてやっていけないのではない。大学で、科学は諦めて違う領域に進むのだろうか、思っていました。

論文は、糖尿病のメカニズムを分子生物学の手法で解析したものでした。「彼女がこの論文を」。テストのスコアだけで生徒の将来を予想していた自分を恥じました。ぶん殴られた気がしました。彼女はその後、博士課程に進みました。学位取得を報告する手紙には次の言葉がありました。

「知識はもろんのことセンスも問わ

れる中で、どう戦うかに苦悩しつつも、学位取得まで何とか続けることができました。結局、優れていなくても辞めなかった私の根性が勝つたのだろうと思っています。基礎研究の世界に長くいたこともあり、実際に人の役に立つ研究・開発に携わりたい気持ちから、製薬会社へ就職しました。学び続けることの妻みが伝わってきました。

彼女のほかにもつながっている卒業生(現在30代前半)がいます。彼らが高校時代をふり返って綴ったレポートが手元にあります。

「決して優等生ではなかった、むしろ落ちぶれていました。勉強を楽しいと思った記憶がありません。でも、ひとつの経験が僕の人生を変えました。SSHで阪大に行った先に、初めて楽しい、好きだと思えることに出会いました。あの出会いがなかったらと思うと恐ろしい。たった2、3日の出来事がある後の人生を大きく変えるような衝撃となりコア(核)を形成することもあります。私の学びの動機は、好奇心以外の何物でもないですが、一言で言うところキメキメかなと思います。なんでそうなるの?という興味、もしかしてこうなのか?という仮定、えっ、そんなまさか?!という学び、じゃあ、こうしたらもっと凄くなるんじゃない?という挑戦、探究。僕は全部にトキメキます」



「故郷を愛せよ 世界の人たる松江っ子」 松江北高校「地域課題研究」の成果発表会ポスター

課題探究の意義に気づかせてくれた生徒たち

高校教員最後の3年は、母校島根県立松江北高校に校長として勤めました。北高は、「質実剛健」を校是とする典型的な地方の進学校です。着任してすぐに課題があることに気づきました。生徒たちに主体的に学ぶ姿勢が希薄であること、既存の延長線上に物事を考えたいという傾向が強いこと、他者や社会のために貢献しようとする気持ちはあ

これらの課題を克服するために何が必要かを先生方と考えました。社会との関わりを意識させ、地域・社会・世界が抱える課題解決に向かう志を育むこと。学ぶことの価値を認識させ学び続ける基盤を形成し、自立と社会貢献をめざす生徒を育てることが必要ではないか、これが結論でした。具体的には、総合的な学習の時間に実施した「地域課題解決型キャリア教育」の導入でした。

習得型(教科の学び)が知識基盤社会に向かう学び、探究型は共助共生社会に向かう学びである。習得型の教え込む授業は答えのある課題に対して正確に情報処理を行い、正解を得る閉じた学び。探究型は行動を必要とし情報を編集する力、他者との共生・協働を促す開いた学びである。双方を組み込んだカリキュラムが理想型ではないかと考えました。

多くの進学校の価値観は、学業と部活動の2軸で形作られています。これは、とても窮屈な世界です。自分らしい居場所が確保できにくいからです。ですから、もっと風通しの良い開かれた学校であるべきだと考えました。生徒、教職員、保護者には、自己と他者に丁寧なやりわらかく向き合おう、情報を取りに行く姿勢で学びを継続しよう、活動の場を学校内外に広げよう、社会とつながろうと言いつづけました。

1年次に必修とした「地域課題研究」では、提言を実行に移したいと、2年

生になっても活動を継続するグループが現れました。現状分析から、国際文化観光都市である松江市は外国人に対しフレンドリーな街になっていると言いはる。外国人に対するおもてなし度を高めるには外国人に気軽に話しかける高齢者の存在が重要ではないかとの仮説から、周囲を巻き込みながら「高齢者のための英会話教室」を開講。最後は、受講生と一緒に観光スポットに出かけて、観光客を装った市内のA.L.T.に対して英語で話しかける練習が行われました。教員は見守るだけで、地域課題研究には生徒の主体的な学びを生み出す可能性があると実感しました。

この取り組みを牽引した一人に、生徒が探究的な学習に本気で取り組むようするために必要なことは何かをたずねてみました。

Q 多忙な生活の中、授業、部活以外に、独自の活動をどうやって実現したのか。

A 物事を前に進めるには、行動するしかないと思っています。行動するということ考えたときに、先生自体に詳しい知識がなかったとしても、知っている人や情報を紹介してもらえたことで、それをきっかけに自分たちで情報を取りに行くことができたと、自分たちのやりたいことの解像度が上がりました。

Q 自分たちの工夫、周囲の支援、活動

動のスキルや構えを伝える動画「高校生からの地域課題研究入門そもそも」を公開。島根大学の教員約300人がメッセージを書き込んだ「高校の教科科目から見る島根大学研究ラインナップ」を公開。そして、地域志向型入試へ出願を考えている高校生と大学教育センター教員をオンラインでつないで行う面談です。

さらに、12月上旬の合格発表から入学するまでの期間は入学前教育として行っています。オンラインによる課題提示、英語eラーニング、オンラインのワークショップ形式で実施する入学前セミナーです。これらのプログラムを「ぶれ大学」と呼んでいます。

へるん入試は、大学入学共通テストは課さず、高校生の「学びのタネ」(好奇心と探究心を多面的に評価することをめざしています。紙ベースの試験による1点刻みの評価から脱却して、書類や面接によって、どんなモチベーションで大学での学びを進めようとしているのか、その原点となる「学びのタネ」を評価します。提出する書類は、高校3年間の中で最も熱量を使って取り組んだことを1つだけ選んで、その振り返りを800字程度に記述する「クロスアップシート」、学びのタネを40字程度で記述し、それを島根大学の教育・研究によりどう成長させたいのかを記述する「志望理由書」です。書類に記載されたことと面接にウエイトを置いて評価を行っています。

高校生の進路決定のプロセスは3つの段階があります。第1段階は、高校時代の経験や頑張ったこと、活動などの経験から気付いた・学んだ・考えたことを振り返る段階。第2段階は学びを動機づけるもの、「学びのタネ」は何かを考え、そこから生まれる取り組みたい問題やテーマを考え、それらに取り組みむ意義や必要性を考える段階。第3段階は「学びのタネ」に基づく自分らしい学びを実現できる環境(進学先・就職先)はどこにあるかを探索し、そこで学びは自分は何をもたらすかを予測する段階です。第1段階の言語化がクロスアップシート、第2、第3段階の表明が志望理由書に相当します。受験生はどんな思いで出願するのか。書類や面接の中で「学びのタネ」をどう言語化してくれるのか。とても楽しみでした。

合格者を対象に行ったアンケートには、へるん入試の出願動機として、以下のような記述がありました。

「今まで自分は何をしてきてこれからは何を研究したいのかを言語化して整理した状態で大学に入学した方が絶対プラスになると思ったから」(法文学部・社会文化学科・地域志向型入試合格者)

「部活動で得た感動や悔しさ、そしてどうしたら沢山の人に合唱の魅力をコロナ禍でも伝えられるかとい

を支える要因は何であったか。A 役割分担をして、自分の得意なことチームに貢献するという体制が自然とできていたこと。両親は自分のやっていることを応援してくれていて、それを大学受験にもつなげてくれたので、ますます理解を示してくれました。

Q なぜ、意欲的・発展的な探究的活動が継続できたのか。

A 先生が学校の勉強以外のことについて時間を割いてくれる「余裕」があったこと、親が活動に対して理解を示してくれたこと、2点でしょう。生徒の好奇心を刺激すること、カリキュラムを作ることと同じくらい、先生や親の理解が得られるシステムも同時並行で作っていくことが大事なのかなあと思ったりもします。

彼女が語ってくれたことに、高校ととりわけ大多数の生徒が大学進学をめざす普通科高校において探究学習を進めるためのヒントが見出せるのではないのでしょうか。



育成型入試としての島根大学総合型選抜I「へるん入試」

退職後、すぐに島根大学アドミツションセンター(現大学教育センター)で働き始めました。高大連携と入試改革・広報が主な業務です。島根大学は令和3年度入試から、大学入学共通テストを課さない総合型選抜I「へるん入試」を、全定員の22%の規模で導入しました。「へるん」とは文豪・小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)のこと、尋常中学の英語教師として松江に赴任し、随想小説などで日本文化を広く世界に伝えだめて「へるんさん」と呼んでいます。ハーンの多彩な活動、オープンマインドな人柄を、高校生の持つ多様な可能性に重ねて、この名前をつけたのです。

この入試は、育成型入試と位置付けられています。出願前に、以下の3つの取り組みをしています。高校生に探究活

う学びのタネを持っていることに気づき、受験を決めました」(教育学部・音楽教育専攻・芸術スポーツ・技能入試合格者)

「工業高校出身で3年間建築を学んできました。クロスアップシートを通して、授業や部活動で建築を学んだこと、建築に関する検定に取り組んだことなどをアピールできると思い、へるん入試を受験しようと思えました」(総合理工学部・建築デザイン学科・芸術・スポーツ・技能入試合格者)

へるん入試が求めていることにまっすぐに向き合っ出て出願してくれたことがわかります。

また、へるん入試で入学した学生が、母校の生徒に向けて発信したメッセージ動画のなかでこんなことを語っています。

「へるん入試で得られたことは、学びのタネが自分の軸になったこと。やってみないと学びたいというのが自分の中心にあることで、将来のことだったり、その学ぶ意味がより明確になりました。また、授業以外の生活の中でも学びのタネに関して、何かヒントが得られないかとか、アンテナをいろんなどところに張って、学びに対する姿勢も変わっていったと思います。へるん入試を受ける過程では、考えさせられることが多くて、いつも毎日頭の中がフル回転で、本気で取り組んでいました。その本気で取り組んだへ

るん入試という経験が、今、私の強みになっていると思います」
へるん入試の受験を通して、学ぶ意欲が向上し、学びの捉え方が変化していることがわかります。とても嬉しく思いました。

学びのタネを育てるために必要なこと

「学びのタネ」を育てるには、価値を大人や教員が決めて生徒・学生に押し込むプッシュ型から、価値の決定者はあくまで生徒・学生本人であることを認めた上で彼らに寄り添い、伴走者として経験知を伝えつつ、最終的に一人ひとりの生徒・学生が自らの意思と能力を高められるよう共創するプル型へと教育を転換することが必要です。大人には、プッシュ型から脱却するアンラーニングが求められていることとです。これまでどおりを変えることは、痛みが伴いますが、「可塑性」を信じて、今しばらく、次代の教育の姿を探究していこうと思っています。



「へるん入試」の名称はラフカディオ・ハーンから